

「木林と森の芸術」展に寄せて

巖谷 國士

「森と芸術」という展覧会は、札幌芸術の森の開園25周年を記念する催しである。この魅力的な企画の監修を依頼されたとき、私はすぐに、札幌芸術の森美術館をかこむ森ばかりでなく、美しい公園や庭園や並木の多い札幌という大都市のたたずまいと、さらに北海道の各地にひろがる雄大な原生林のありさまを思い浮かべた。

実際、北海道は日本列島でも有数の森にめぐまれた地方であり、札幌はそこを代表する森の都である。

とすれば、地球上から森が急速に失われつつある今日、人間にとって森とは何か、人間はこれまで森とどうかかわってきたか、これからはどうかかわってゆくべきか、という本質的な問いをふくめて、広い視野と興行きをそなえた展覧会をひらくのに、これほどふさわしい場所は少ないのではあるまいか、と思っただけである。

タイトルはすばり「森と芸術」だが、これは単に森を写実的に描くだけの、いわゆる風景

景面の展覧会を意味しない。

芸術とは本来、ただ自然の外觀を模倣するのではなく、多種多様な方法で自然の生命を体現し、自然の本質に迫ろうとする行為だからである。

さまざまな時代と地域の芸術作品―絵画・版画をはじめ写真、彫刻、オブジェ、ガラス工芸・陶芸・木工玩具、メ

ルヘンの挿絵や絵本、アニメーションの背景画、博物館本

いわや・くにお 明治学院大名誉教授、フランス文学者、美術批評家。1943年東京生まれ。東大文学部卒、同大学院修了。シュルレアリスム研究と実践を軸に、広く文学、美術、写真、映画、メルヘン、旅、博物、庭園、都市に



ついでに著述や、展覧会監修、講演、写真個展などの活動を行う。主著は「シュルレアリスムとは何か」「封印された星」「フランス庭園の旅」映画「幻想の季節」ほか。主訳著は「アルトン」「ナジャ」、エルンスト「百頭女」ほか。

上. 楽園の姿

共生から離れ 郷愁なお

展示室の構成は図録をかねた著書「森と芸術」(平凡社)の章分けにもとづき、第一章「楽園としての森ではまず人間と森の歴史をさかのぼる。16世紀ドイツの巨匠アルブレヒト・デューラーの名作版画2点が観客を迎えるだろう。ヨーロッパの各時代に描かれたアダムとエヴァ(イヴ)の絵は、しばしばエデンの園を森とみなしてきた。見て美しく食べて美味しい木の実にめぐまれ、動物や植物の共生する自然のなかで、労働もせず幸福にくらしていた太古の人間のありかたについて、旧約聖書にかぎらず、世界中の多くの民族の神話が記憶している。

おぼえ、都市を築き、文明なるものをいとむ運命にあった。こうして自然との共生から遠ざかったことの端緒が、すなわちデューラーの描く「人類の墮落」「楽園追放」である。

だが先まわりはするまい。次回以後、それぞれのテーマをもつ各章の展示室をめぐって、また北海道の森にもどってゆくことにしよう。

だし、ほぼ1万2千年前にもっとも今日に近い氷河期がおわってからは、温帯にひろがるオーク(ブナ科コナラ属)の森で、ドングリなどの木の実を食べてくらしていたのだから。

けれども気候変動や人口増加のゆえか、人間は森を去って平地に住み、農耕と畜産をおびる。ポール・ゴーギャンの楽園「かぐわしき大地」は熱帯のタヒチ島だし、20世紀の素朴画家アンドレ・ボッシュヤンの「楽園」に描かれるのは、もはや人間のいない幻想的な木々と花々だけの異境である。

すでに読者の多くは、日本の森を連想しておられることだろう。かつて縄文人は長いあいだ森を生活の場としていたし、アイヌ民族もまたそうだった。神々の住まう「聖なる森」は彼らにとって、今日よりもはるかに身近な楽園であった。



ギュスターヴ・ドレ「赤ずきんちゃん」

(「ペローの昔話集」より)

1864年 24.3×19.5cm 木口木版紙

(明治学院大学図書館蔵)

札幌芸術の森25周年記念展「森と芸術」は10月23日(日)まで、札幌芸術の森美術館(南区芸術の森2)で開催中。

「木林と芸術」展に寄せて

巖谷 國士

森という聖域には神々や妖精たちが住んでいた。ギリシア・ローマ神話にあらわれる森の精サテュロスやニンフなどは、古代以来のさまざまな芸術に登場している。中世伝説にかかわる作品でも、森に出没する妖精や怪物の姿はおなじみである。

キリスト教化される前のケルト人やゲルマン人にとって、森は神殿そのものであり、樹木の一本一本にも霊魂が宿ると考えられていた。それは日本でも同様だったが、とくにフナやカシをふくむオーク種の木は神聖視され、ヨーロッパではしばしば絵画に描かれてきた。

こうして本展の図録「森と芸術」(平凡社の第2章にあたる「神話と伝説の森」の展示室を抜けると、ようやく風景画への視界がひらける。風景だけを主題とする絵が描かれるようになったのは、じつはそう昔のことではなかった。

17世紀前半のローマに住み、古代の田園詩を思わせる

中. 風景画以後

新たな自然観 未来託す

優雅な自然光景を描いたクロード・ロランは、第3章「風景画のなかの森」をひらく先駆者である。このジャンルを完成させたのはすこしあとのオランダの画家たちで、代表者のひとりヤコフ・ファン・ロイスタールの活写する森の

木々は、広い空の下で揺れうごくかに見える。風景画の流行は近代社会の成立と並行していた。19世紀には盛期がおとずれる。バルビゾン派から印象派にいたるフランス絵画の展開は、都会人が自然の風景に癒やしを求めていたことに呼応する。

だが世紀末に近づくころ、自然観に大きな変化がおこる。近代文明の合理主義と科学技術信仰に反抗し、ブルターニュ半島からタヒチ島へと放浪したゴーギャンの唱える象徴主義は、伝統的な写実を排し、文明に侵されていない野生の自然を追いもとめることと、20世紀美術への道をひらいた。

アール・ヌーヴォーの工芸美術に想を得たガラス作品の数々は、展示室で一堂に会す

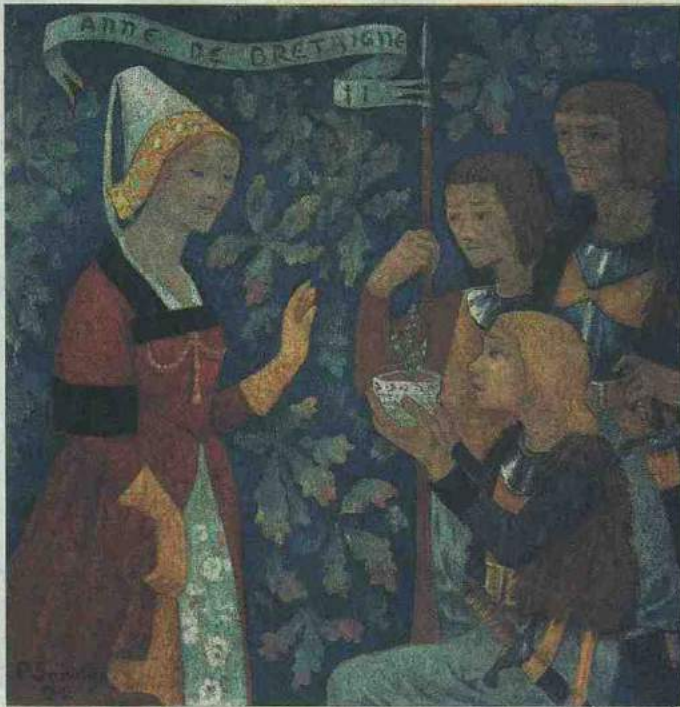
東日本大震災後のテレビで、津波で壊滅した港町の映像を眺めていたとき、見わたすかぎりの瓦礫のなかにただ1本、生きのこって新芽を出している梅の若木の姿に感動をおぼえた。

けさと安らぎにみちた風景画を完成させた。

も同時期の新しい自然観を体現している。ナンシー派のエミール・ガレは「わが根源は森の奥にあり」という標語をかかげた。素人植物学者として森を歩き、森の生物の観察と研究をもとに、ガラス工芸や陶芸、家具の制作をつづけた。

ユのアンヌ女公への礼讃」は意味が深い。ほとんど知られていないこの作品に出会ったとき、監修をしている筆者自身心が打たれ、展覧会のいわば象徴として、図録のカバー絵に選んだほどである。

アンヌは中世末期ブルターニュ公国の若い女性君主だったが、隣の強国フランスの王と政略結婚することで、森の民ケルト人の住む公国の危機を回避した。彼女にささげられた小さな鉢の若木には、世界の未来が託されているだろう。セリュジエは第1次大戦の惨禍のあとでこの絵を描いたのだった。



ポール・セリュジエ
「ブルターニュのアンヌ女公への礼讃」
1922年 100.5×95センチ 油彩・カンバス
(ヤマザキマザック美術館蔵)

るとき、美しい象徴の森のように見えるだろう。この第4章「アール・ヌーヴォーと象徴の森」に展示されるのは、だがガラスなどの工芸作品ばかりではない。壁面には象徴主義絵画がならぶ。先駆者ギュスターヴ・モローの女神のいる幻想の森や、エドワード・バーン・ジョーンズの「フラワーブック」の優美に文様化された木々や花々もある。

それ以上に目をひかれるのは、ゴーギャンの象徴主義をうけついでナビ(預言者の意)派を主唱した画家、ポール・セリュジエの油彩画だろう。とくに後者の「ブルターニ

札幌芸術の森25周年記念展「森と芸術」は10月23日回まで、札幌芸術の森美術館(南区芸術の森2)で開催中。

「木林と森の芸術」展に寄せて

巖谷 國士

森とかかわりのあるアートは絵画・彫刻などにかぎらない。古代に起源をもつ庭園芸術も、かつては楽園をかたどるものだった。図録「森と芸術」(平凡社)の第5章「庭園と『聖なる森』」にあたる展示室では、いくつかの庭園の絵や写真を通して、各時代の自然観や森のありかたを追ってゆく。

とくにイタリア中部にのこる16世紀の庭園「ボマルツォの聖なる森」を撮った川田喜久治の写真は強烈だ。怪物公園の通称どおり、森の小道にそって巨大な神々や妖精・動物・怪物たちの石像が立ちあられる。

世界の七不思議に対抗した驚異のマニエリスム庭園だが、基本はローマ神話にならう演出で、太古の「聖なる森」の魅惑と恐怖を回顧している。どこかノスタルジアが漂うのもそのためだろう。

メルヘン(昔話)にも森はつきものである。「赤ずきんちゃん」は森で狼の話の聞いてとんだ目に遭うし、「ヘンゼルとグレーテル」は森で

迷ってお菓子の家になどつき、人食い魔女につかまってしまふ。

そんな物語に想像力を刺激され、さまざまな挿絵が描かれた。前者なら今回の展覧会のポスターに使われるギユス・ドーレのもの、後者なら

らアール・ヌーヴォー絵本の代表者カイ・ニールセンのものがすばらしい。

神話や伝説と同様、キリスト教以前からの伝承にもつくメルヘンは、かつて森が身近だった時代の記憶をとどめている。メルヘンにとつて森はいつも、妖精や怪物の住む魅惑と恐怖の世界である。

それを受けついで創作童話や絵本でも、森の表現には心ひかれる。「雪の女王」や「ふしぎの国のアリス」から「も

りのこびとたち」まで、第6章「メルヘンと絵本の森」の部屋は、美しく切ない森の記憶にみちている。

子どもごころに感じた森の「魅惑と恐怖」をけっして忘れない、と書いたのはシュルレアリスムの画家マックス・エルンストである。その言葉のとおり、生涯にわたって森のモチーフを保ちつづけた

が、彼の絵や彫刻はもちろん写真ではなく、いわば物質に

目を通して、日常の現実のなかに超現実を発見しようとする生き方こそが、シュルレアリスムの基本である。

こうして第7章「シュルレアリスムの森」の部屋では、神話やメルヘンを思わせる妖精や怪物に加えて、博物誌や民俗学にも通じる超現実的な自然の表現がくりひろげられる。

第8章「日本列島の森」になると、シュルレアリスムや

の森」を大きく扱い、森のなかの野外展示へと誘う。先住民アイヌへのオマージュをこめて、砂澤ビッキの壮大な木彫作品を見ることになる。

アイヌ民族は「森の民」である。縄文人や地球上の多くの先住民と同様、森を生活の拠点としたばかりでなく、自然環境として維持するすべも知っていた。北海道に今日なお多くの森がのこっているのは、ひとつには彼らのおかげである。

アイヌ民族の伝承と芸術はいまも生きています。その血をひく砂澤ビッキの作品には森と木の精が宿っている。

とくに野外にそりたつ「四つの風」は記念碑的な大作である。巨大な4本の柱のうち、2本はのちに倒壊したままだ。作品を「風雪という響」にゆだねたいという遺言が守られたのである。

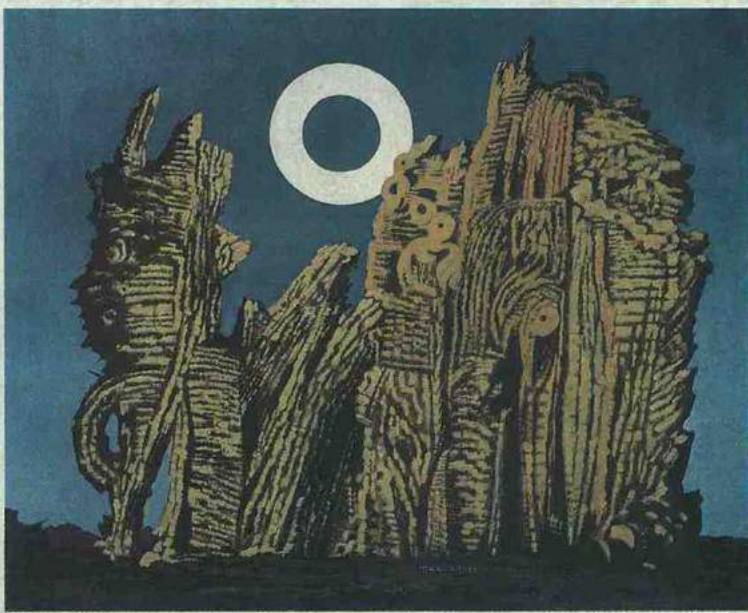
自然はたえず変化して元にもどらない。森は生成と破壊の場である。そんな森と共生していた民族の自然観をうけつづける作品こそは、「森と芸術」展の最後を飾るのにふさわしい。

(いわや・くにお)フランス文学者・明治学院大名誉教授

札幌芸術の森25周年記念展「森と芸術」は10月23日回まで、札幌芸術の森美術館(南区芸術の森2)で開催中。

下. 怪物登場

魅惑と恐怖 記憶の世界



還元された自然のよびおこす超現実の表現だった。

第1次大戦という惨事を体験してからは、もはや伝統的な写実の生きのびる余地がなく、芸術はしだいに抽象へと傾斜してゆく。そのなかでシュルレアリスムだけは具体的な形象を捨てず、森の表現に

もいつそう強い現代性を与えてきた。

ひとつには、文明と対立する野生の復権だ。アンドレ・フルトンのいわゆる「野生の

マックス・エルンスト「灰色の森」

1927年 80×100 油彩・カンバス

(国立国際美術館蔵)

©ADAGP, Paris&SIPA, Tokyo, 2011